

# 環境保全型農業直接支払交付金 最終評価について



平成30年11月6日  
農業経営課 環境・植防グループ

# 目次

I 制度の概要と最終評価について

II 最終評価報告書（案）について

1 交付状況の点検

2 環境保全効果等の評価

3 施策の点検及び今後の対応

4 まとめ

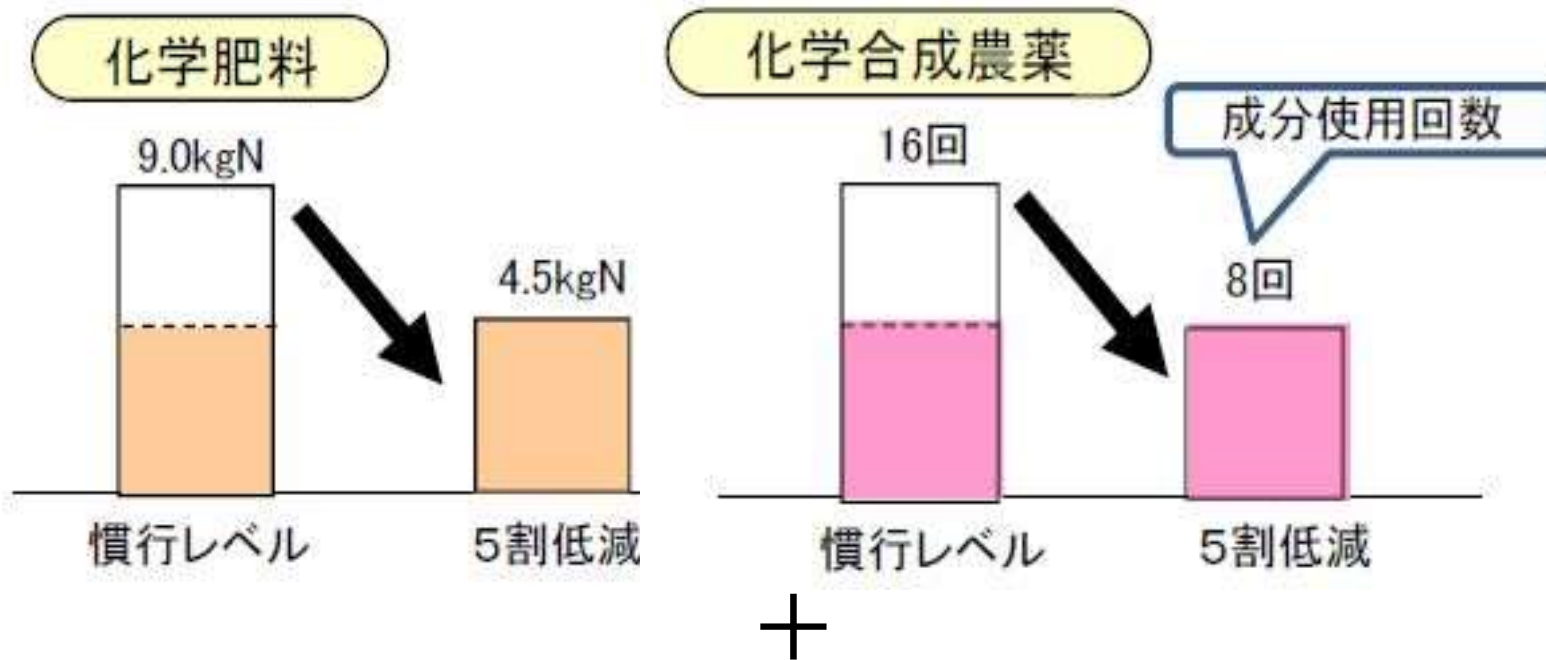
# I 制度の概要と最終評価について

# 環境保全型農業直接支払制度の概要

環境保全に効果の高い取組に対して支援

有機農業

または



地球温暖化防止・生物多様性保全の営農活動

## 対象となる取組

全国共通取組	カバークropp
	たい肥の施用
	有機農業
愛知県 地域特認取組	草生栽培
	I P Mの実践

# 地球温暖化防止の営農活動

○ カバークロップ(緑肥)や堆肥の一部が土壤中に貯蔵

## カバークロップ



交付単価: 8,000円/10a

## 堆肥の施用



交付単価: 4,400円/10a

## 草生栽培



交付単価: 5,000円/10a  
(果樹・茶が対象)



# 生物多様性保全の営農活動

- 環境への負荷を軽減し、生物多様性を確保

## 有機農業



交付単価：8,000円/10a

## IPMの実践

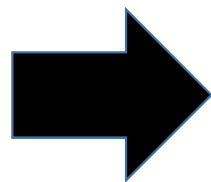


交付単価：4,000円/10a  
(水稲が対象)

# 支援の対象となる農業者の要件の変更

29年度まで

- ・エコファーマー認定
- ・農業環境規範に基づく点検の実施



30年度以降

- ・国際水準GAPの理解と実践※

※ 生産工程について、「食品安全」「環境保全」「労働安全」「人権保護」「農場経営管理」の観点で点検し改善策の実施



# 最終評価

○ 4年目に県は最終評価を実施

	平成27年度 (1年目)	平成28年度 (2年目)	平成29年度 (3年目)	平成30年度 (4年目)	平成31年度 (5年目)
国	取組点検	取組点検	取組点検	中間年評価	施策評価
県	取組点検	取組点検	調査・ 中間年 評価	追加調査 ・ 最終評価	

報告

## Ⅱ 最終評価報告書（案）について

# 1 交付状況の点検

# 1 交付状況の点検

## ○ 全体の件数及び実施面積

年度	実施件数（件）	交付額計（千円）	実施面積（ha）
H27	93	24,972	402
H28	50	24,418	394
H29	51	24,716	401
H30	52	24,611	393

# 取組別実施面積①

○ 全国共通取組

単位：ha

年度	カバークropp	堆肥の施用	有機農業
H27	101	200	100
H28	103	170	119
H29	93	180	125
H30	93	189	111

## 取組別実施面積②

○ 地域特認取組

単位：ha

年度	草生栽培	I P Mの実践
H27	1	—
H28	0.28	2
H29	0.28	3
H30	0.28	0

## 2 環境保全効果等の評価

- 地球温暖化防止効果
- 生物多様性保全効果

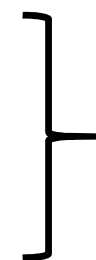


# 地球温暖化防止効果

○取組による土壌貯留炭素量を算出  
(単位あたり温室効果ガス削減量)

○調査対象

カバークropp	13件
堆肥の取組	9件
草生栽培	1件
有機農業	1件



平成29年度調査  
(中間年評価)



平成30年度  
追加調査

# 地球温暖化防止効果の調査方法



農研機構  
農業環境変動センターが  
作成した、左図のサイト  
で土壌炭素量を計算

## [What's New](#)

● 土壌のCO<sub>2</sub>吸収量を  
簡単に計算できます。

本サイトでは、場所や管理の情報を入力すると、  
土壌のCO<sub>2</sub>吸収量を計算することができます。  
あなたの畑のCO<sub>2</sub>吸収量を推定してみませんか？

調べたい場所 + 管理方法 = 土壌のCO<sub>2</sub>吸収量

▶ [くわしくはこちら](#)



トップページ（アドレス：<http://soilco2.dc.affrc.go.jp/>）

# 地球温暖化防止効果

項目	単位あたり温室効果ガス削減量 (t-CO <sub>2</sub> /年/ha)	実施面積 (ha)	温室効果ガス削減量 (t-CO <sub>2</sub> /年)
カバークropp	1.42	93	132.1
堆肥の施用	2.79	180	502.2
草生栽培	2.56	0.28	0.7
有機農業	1.06	111	117.7

## 生物多様性保全効果（中間年評価より）

- マニュアルに定められた指標生物をカウント
- 事業に取り組む同一の生産者のほ場を調査

	有機農業	I P Mの実践	対照区※
スコア計	4	3	4
評価	A	B	A

※ 有機農業及びI P Mの実践の取組を行っていないが、栽培における化学合成農薬は不使用のほ場（水田）

### 3 施策の点検及び今後の対応

- 全国共通取組
- 地域特認取組

## 全国共通取組の効果を高めるために

- カバークロップのすき込みと堆肥施用の併用
- 堆肥施用量は有機質資材施用基準を目安  
(基準を下回る場合)
- 有機農業においても、緑肥や堆肥の積極利用

# 地域特認取組の実施状況と効果

## ○ 実施面積 (ha)

取組名/年度	H 2 7	H 2 8	H 2 9	H 3 0
草生栽培	1	0 (0.28)	0 (0.28)	0 (0.28)
I P Mの実践	—	2	3	0

## ○ 効果測定結果

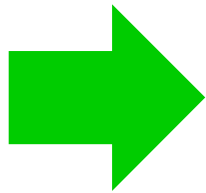
草生栽培 (地球温暖化防止)	0.7 (t-CO2/年/ha)
I P Mの実践 (生物多様性保全)	B



# 地域特認取組の今後の対応方針

## ○ 草生栽培

- 温室効果ガス削減効果を確認
- 取組規模が小さい  
(H25~27の1haをピークに減少)

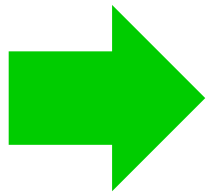


今後の取組状況を注視し、  
取組のあり方を検討

# 地域特認取組の今後の対応方針

## ○ I P Mの実践

- 生物多様性保全効果はやや低い
- 平成30年度は取組がない



今後の取組状況を注視し、  
取組のあり方を検討

## 4 課題と今後の取組（まとめ）

### 【課題】

取組面積の広がりが少ない

### 【対策】

全ての取組に環境保全効果があることを確認



環境保全効果を周知し、取組の面積拡大を推進